

「闇の聖地」で音に触る

ひろせ こうじろう
廣瀬 浩二郎
民博民族文化研究所

九月二日、京都の鞍馬寺で開催された清虚洞一絃琴の演奏会に解説者として参加した。
僕は大学・大学院で日本史を専攻していたが、芸能史の研究者ではないし、一絃琴はもちろん、邦楽とは縁のない日々を送っている。
そんな僕になぜ解説役の依頼があったのか。

闇という装置を活用する

ここ数年、僕は「闇の仕掛け人」と自称して、さまざまな暗闇体験イベントをおこなっている。昨年三月には津軽三味線の暗闇ライブを企画し、演奏を盛り上げる文字どおりの口三味線役で出演した。僕が暗闇イベントを実施する際のキーワードは「耕す」と「触る」のふたつである。現代人の日常生活は視覚情報に支配されている。その便利な視覚を使えない（使わない）闇に身を置いてはじめて、多くの人が自己の潜在能力、視覚以外の五感の可能性に気づく。この「感覚の多様性」を呼び覚ます行為を僕は「耕す」と名づけている。

人間の五感のなかで僕がもっとも重視するのは触覚である。皮膚感覚という語が示すように、触覚は全身に分布している。音楽を鑑賞する場合も、単に耳で聴くだけでなく、身体を駆使して音を肌でとらえる。これは「音に触る」ともいえるだろう。普段僕たちが依拠している視覚を離れ、「耕す」と「触る」に集中する。そのための装置として闇を積極的に活用するのが僕の狙いである。

鞍馬山は闇の霊山である

そんなわけで「闇の仕掛け人」は鞍馬山の演奏会でも闇の広さと深さを縦横に（好き勝手に？）語った。近年、鞍馬山はパワースポットとして注目されているが、歴史を振り返ってみると「闇の聖地」であったことがわかる。華やかな都、平安京の北方に位置する鞍馬は、光を際立たせる闇の役割を果たしてきた。無論、ここでいう闇とは否定的なものではなく、光を生み育てるエネルギーの源泉という意味である。合気道の開祖・植芝盛平（一八八三～一九六九）は、深夜の鞍馬山の闇のなかで真剣を用いた稽古を繰り返し、合気の極意を会得した。まさに視覚を使わない闇が独自の武道技法を発展させたといえよう。

鞍馬山といえば、源義経が幼少年期を過ごした地としても知られている。義経は日本史を代表する英雄の一人だが、その歴史的評価は多種多様である。僕は一九八〇～九〇年代に京都大学で日本史を学習した。入学直後に受けた中世史の講義は、カルチャーショックの連続だった。源平合戦の位置づけ、公家と武家の関係など、高校までの教科書で常識とされていた歴史は、鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』に基づく東国中心の史観であることを再認識した。京都の王権に近い史料、摂政・関白を歴任した九条兼実の日記『玉葉』などを尊重すれば、おのずと歴史解釈は異なったものとなる。平氏滅亡後の義経の急激な没落についても、伝統的に東と西では見解が相違している。

ここで義経論に深入りするつもりはないが、いずれにしても現実の政治（光）の世界で義経は頼朝に敗れ、目に見えない闇の領域で生き続けることになる。日本人の想像力と創造力により幾多の義経伝説が生成され、彼は反権力のヒーローとして絶大な人気を勝ち取っていく。義経の人格形成のルーツに鞍馬山の闇があったことは、単なる偶然ではないだろう。

心の闇を掘り起こす一絃琴

今回の一絃琴演奏会は、毎年九月に開かれる義経祭の奉賛イベントとして催された。義経が実際に体感した鞍馬の「氣」に包まれながら、僕は闇の現代的意義を考えた。一絃琴は江戸後期、国学・復古思想が流行するなかで、精神性を重んじる楽器として各地に普及した。琴の形を複雑にするのでなく、あえて一本の絃にこだわる。シンプルで透明な絃の響きは、人間の心の闇、感覚の多様性を掘り起こす力を秘めている。心を静め琴の音、そして鞍馬の自然の声に「触る」。僕の口三味線（解説）は邪魔だったかもしれないが、澄み切った一絃琴の調べは来場者個々の闇を「耕す」大なる刺激となったようだ。



義経堂
『百の義経』（鞍馬寺出版部）より転載



鞍馬寺の一絃琴
演奏会にて



清虚洞メンバーによる一絃琴演奏



暗闇ライブ案内のチラシ（部分）